聖カタリナ大学研究紀要
第 33 号　041 ～ 053　2021

保育者が捉えた地域子育て支援拠点における前向き子育て支援プログラム（グループトリプルＰ）を受講した親子の変化の気づき

Awareness of Changes in Parents and Children who Took the Positive Parenting Program (Group Triple P) at Community-Based Childrearing Support Centers by Nursery Teachers

仲野　由香利・増田　裕美

要旨

地域の子育て支援拠点において実施されるグループトリプルＰの託児担当保育者が捉えた親子の変化を明らかにし，保育者が捉える地域子育て支援拠点でのトリプルＰの意義を検討することを目的とした。託児担当５名に対し，プログラム実施前後の SDQ アンケート調査と，終了後の半構造化面接にて内容を分析した。その結果，保育者は，親の子どもへの関わり方や気持ちの持ち方の変化を捉えていた。また，日々の保育実践の中で，親の行動変容への対応に苦慮していたが，トリプルＰを活用することで親の変化を期待し，保育者の負担の軽減につながっていることが考えられた。地域子育て支援拠点において，子育て支援の必要な親をトリプルＰにコーディネートすることで重層的な支援が可能になることが示唆された。

キーワード：地域子育て支援拠点，前向き子育て支援プログラム（グループトリプル P），保育者

1. 研究の背景

子育てをめぐる環境が大きく変化する中，地域子育て支援拠点事業は児童福祉法の中で第二種社会福祉事業として位置付けられ，現在，全国 7,578 か所（令和元年度）[1] にて実施されている。主に乳幼児期の子どもを育てている保護者に対して，①交流の場の提供，交流促進　②子育てに関する相談，援助　③地域子育て関連情報の提供　④子育て・子育て支援に関する講習などに取り組むことを基本的な役割とし [2]，日々の丁寧な関わりや親子と地域を結びつける支援が求められている。周防ら [3] は拠点を利用する母親と子どもの現状について，親のかかわりの不適切さから育ちに影響が生じ愛着形

成の課題が疑われたり，大人に受け入れてほしいという承認欲求が目立ったり，他児との関わり方が育っていない様子が見られる子どもがいるなど，様々な課題を指摘している。そして，このような課題を支援するために，スタッフは母親との信頼関係を築く過程で母親や子どもの困り感や課題に気づき，他機関と連携する必要性があるかどうかを判断する力が求められていると考察している。現時点では，親子関係に深刻な状態には至っていないが，このような状態が続くと育児放棄や児童虐待等に繋がる可能性も予測され，早期に予防的な介入を図る必要があると考えられる。地域子育て支援拠点事業に従事するスタッフは，子育て支援に関して意欲があり，子育てに関する知識・経験を有するものと実施要綱により規定されている。橋本[4]の調査において，スタッフの94.7％に保育士資格を有しており，保育所保育士の勤務経験が90.6％に及んでいたという結果がある。2018年に保育所保育指針が改正され，「保護者支援」の項目が「子育て支援」に変わり，保護者への積極的な支援と，地域連携の中での保育者の専門的役割が求められているといえる。

肥後[5]は気になる子への対応として保護者を支援するという視点の重要性を指摘し，保護者の子どもとの関わりにおける困難さを支援する一つの方法としてペアレント・トレーニング（親訓練：以下，PTと省略する）を紹介している。研究者らが所属するW大学子育て研究会では，2011年以降X県内で，発達上の問題のある子どもや育児に困難を抱えている保護者に対して，PTのうちの一つである前向き子育て支援プログラム（Positive Parenting Program：Triple P，以下，トリプルP）を活用した子育て支援活動を展開している。今までの活動の効果について，評価指標としての子育て場面での親のふるまい（PS），子どもの行動の難しさ（SDQ），親の抑うつ・不安・ストレス（DASS）のそれぞれの項目において有意な結果を得ている[6-8]。この評価指標の尺度は，プログラムを開発したM.R.Sanders博士らの先行研究において信頼性が確認されているものである。しかし，実施前後の保護者アンケートに基づく評価であり他者の評価を得ていない。

2017年から，Y市の一つの地域子育て支援拠点（以下，Z拠点）において，障がいの疑いも含め育児困難感のある保護者に対して，予防的な取り組みとしてトリプルP介入レベル4，スタンダードグループトリプルP（以下，グループトリプルP）を実施することとした。多くは未就園の子どもの保護者が対象となるためプログラムの実践には託児が必要であり，この拠点のスタッフが託児担当として関わることとなった。そこで，託児時に子どもや保護者と接するスタッフが親子の変化に気づきがあるのではないかと推測した。先行研究において，こうしたPTに保育者が直接関わった報告は見当たらず，専門職として保護者を支援するための研修や養成などに活用されるにとどまっているのが現状である。そこで，当事者である親の調査紙による自己評価に加え，第三者の立場である保育者の視点を加えることで，多角的にプログラムの評価ができるのではないかと考えた。そこで，本研究では地域子育て支援拠点におけるPTの実践について，保育者の視点で参加した親子の変化を捉え，その有効性を検討する。

2. 目的

地域の子育て支援拠点において実施されるグループトリプルＰの託児担当保育者が捉えた親子の変化を明らかにし，地域子育て支援拠点でのトリプルＰの意義を検討することである。

3. プログラムの概要

トリプルＰは，行動と情緒の問題を現在抱える，または将来生じる可能性のある子どもの親を対象に作られた５段階の介入レベルがある家族介入治療システムである[9)]。親の知識，技術，自信を増幅させることで子どもの行動，情緒，発達の重度な問題を予防することを目的としている。そのうちのグループトリプルＰは１セッション 120 分程度のグループセッションを１週間ごとに５回と，３回の電話セッションを行う約８週間の集中プログラムである（図１）。さらに，約３か月後にフォローアップ研修を実施し，継続支援を行う。介入は心理学の専門家のプロバイダートレーナーによる養成講習を受講し，認定試験に合格した者がファシリテーターとして実施する。この研究期間のファシリテーターは，Ｗ大学子育て研究会のメンバーとＹ市に勤務する保育士の計７名が交代で担当した。

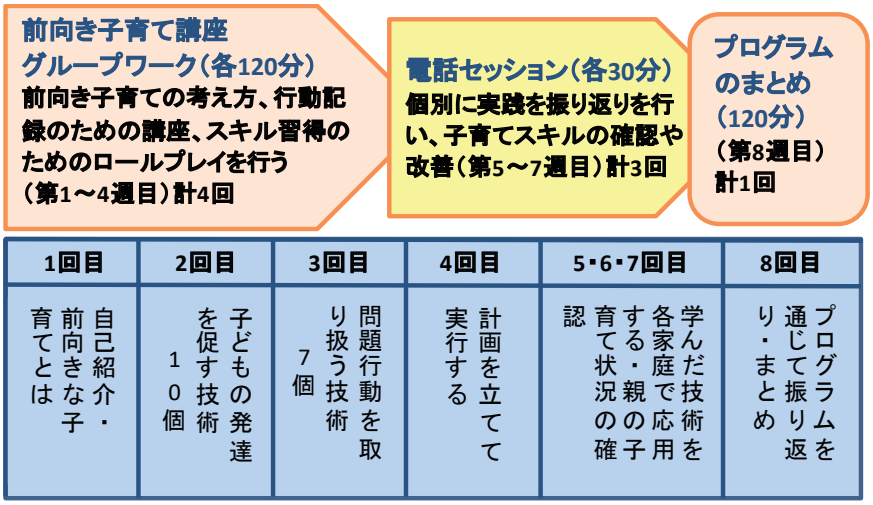

図１　グループトリプルＰの概要

今回のプログラムの対象は，Ｚ拠点が実施する親子教室（Ｙ市親子クラス事業で，週２回のデイケアプログラム）やひろばの利用者などで，診断の有無に関わらず，①子どもの発達上に問題を指摘されたことがある　②子どもの発達上の問題または育児について困っている状況がある親子である。支援に関係する専門職者が声をかけて参加をすすめ，2018 年は参加者７名のうち託児が必要な子どもは６名で，今回の観察対象（以後，観察親・観察児）とした。

4. 研究方法

1）対象者

対象者は，託児担当のスタッフとして主にかかわった５名で，普段はＺ拠点の中で行われている事業に各々従事している。

2）研究期間

2018 年 4 月～ 2019 年 3 月までである。

3）研究方法

（1）グループトリプルＰ実施時に託児スタッフとして参加する。

グループセッション５回と，フォローアップ１回の計６回である。セッション開始前に観察親から観察児を預かり，終了後に引き渡す。託児をする部屋はＺ拠点の３階で，セッションする部屋とは別に準備する。託児終了後，託児報告書に気づいたことなどを記入する。

フェースシート作成のため，プログラム実施前に対象者の年齢，現在の職種，保育者としての職歴，発達障がいのある子どもへのかかわりの経験，発達障がいのある子どもとのかかわりの中で困難や課題と感じていること，PT の学習や実践経験についてアンケートを実施する。

（2）グループトリプルＰセッション終了毎に，スタッフカンファレンスに参加する。

託児終了後，スタッフカンファレンスに参加し，託児中の観察児の様子や，セッション前後の親子の状況などを情報提供する。また，スタッフから振り返りなどを聞き，情報共有や協議を行う。カンファレンス中は，同意を得て IC レコーダーに録音し，逐語録を作成し，インタビューの内容と併せて分析を行う。

（3）SDQ（Strengths And Difficulties Questionnaire）のアンケート調査を実施する。

子どもの社会的に好ましい行動と難しい行動に対する親の認識を測る尺度として SDQ25 項目[10]がある。保育者の視点から，初回とプログラム終了後，フォローアップ終了後に記入する。

（4）フォローアップ全プログラム終了後に１対１の半構造化インタビューを実施する。

質問項目は①実施前の親子の様子や印象，課題として感じていたこと　②トリプルＰ実施中の親子の様子や気づいたこと　③終了後の親子の様子や気づいたこと　④終了後に課題として感じていること　⑤全体の評価と感想とする。同意を得て IC レコーダーに録音し，逐語録を作成して内容を分析する。

4）分析方法

質問紙 SDQ は，初回とプログラム終了後，フォローアップ終了後に，“あてはまる”の項目にチェックした件数を，同一者と全体で比較する。

インタビューでの発言内容は，逐語録から保育者の視点から捉えた観察親・観察児の変化の気づきについて取り上げ，内容を分析する。その際に，カンファレンスの発言や託児報告書を参考とする。

質的データの分析にあたっては，研究者個人の考えではなく客観的分析を行うため，分析の過程は研究者が独立して行い，筆者らで協議し，信頼性と妥当性の確保に努めた。

5）倫理的配慮

実施主体のＺ拠点管理者に，趣旨を説明し許可を得た。対象者と観察親には，研究の目的と倫理的配慮について同意書に明記し，さらに口頭にて説明と依頼を行った。

尚，本研究は，著者が所属する聖カタリナ大学短期大学部倫理委員会における倫理審査の承認を得ている（保倫 18-01）。

5. 結果

1）観察親・観察児と対象者の属性（表 1，2）

観察親 6 名は全員母親で，平均年齢は 35.7 歳，全員が第一子であった。観察児は全員男児で，平均年齢は 2 歳 5 か月であった。5 組がＺ拠点の事業を利用しており，親子教室の参加者は 3 組であった。観察親のグループセッションの出席率は 97.7 %，フォローアップが 85.7 %，併せて 95.2 %であった。セッションを欠席した場合は，別日に時間をとり内容の説明を行った。

表 1　観察親・観察児の概要

	観察親の年齢	観察児の年齢	性別	プログラム参加時の拠点との関わり
A	20歳代	1歳10か月	男	他園からの紹介
B	40歳代	2歳1か月	男	センター利用
C	30歳代	3歳1か月	男	親子教室
D	30歳代	2歳2か月	男	一時預かり
E	30歳代	2歳7か月	男	親子教室
F	30歳代	2歳10か月	男	親子教室

対象者 5 名は全員保育士で，平均年齢 47.3 歳，平均経験年数が 24.7 年であった。全員，発達障がいの子どもの保育経験がある。PT の実践経験がある者は 1 名で，ファシリテーターとして今回のセッションにも参加している。他 4 名も，空き時間にセッションの見学を行った。

表 2　対象者の概要

	年齢	現在の担当	勤務形態	資格	経験年数	PT実践経験
Ⅰ	40代	親子教室	非常勤	幼稚園教諭・保育士	20～29年	なし
Ⅱ	40代	親子教室	非常勤	幼稚園教諭・保育士	10～19年	なし
Ⅲ	40代	発達障がい支援担当	常勤	幼稚園教諭・保育士	20～29年	あり
Ⅳ	60代	管理者	常勤	保育士	30年以上	なし
Ⅴ	40代	一時預かり担当	常勤	幼稚園教諭・保育士	20～29年	なし

2）質問紙 SDQ を用いた観察児の評価（表 3）

アンケートは，初回とプログラム終了後，フォローアップ終了後の 3 回について実施予定であったが，フォローアップ時に対象者の 2 名が託児担当から外れたため，初回とプログラム終了後での比較となった。質問紙 SDQ の逆転項目【行為】7，【多動性】21・25，【交友】11・14 は，“あてはまる”にチェックをしていないため除外した。

SDQ のうち【感情】【行為】【多動性】【交友】の課題となる行動の 4 つの項目において，“あてはまる”にチェックした総件数は，プログラム前 48 件でプログラム後は 77 件であった。最もチェックが多かったのは【感情】で，プログラム前 14 件であったが，プログラム後 29 件で，【行為】【交友】も増加していた。【社交】は，好ましい行動であるが，プログラム前 7 件で，プログラム後は 10 件であった。

個々の観察児を前後で見ると，C 児のみチェックが減っていた。項目のうち，【感情】の“16. 目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり，すぐに自信をなくす”と，【交友】の“6. 一人でいるのが好きで，一人で遊ぶことが多い”が減り，【社交】の項目のチェックが増えていた。D 児と F 児は，【多動性】の“2. おちつきがなく，長い間じっとしていられない”や“15. すぐに気が散りやすく，注意を集中できない”が減っていたが，【感情】や【行為】の項目のチェックが増えていた。

表 3　SDQ でチェックした項目と数

			観察児											
			A		B		C		D		E		F	
項目		内容	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
感情	3	頭がいたい、お腹がいたいなど、体調不良をよくうったえる												2
	8	心配ごとが多く、いつも不安なようだ	1	1		1	1	1		1	1	1		
	13	おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある		2						1	1	2		
	16	目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす	1	3		1	2	1			3	5		1
	24	こわがりで、すぐにおびえたりする		3			1	1			3	2		
行為	5	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある				1	1					1	4	4
	12	よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする								1				2
	18	よくうそをついたり、ごまかしたりする												2
	22	家や学校、その他から物を盗んだりする												
多動性	2	おちつきがなく、長い間じっとしていられない				2			3	1			5	4
	10	いつもそわそわしたり、もじもじしている										1	1	1
	15	すぐに気が散りやすく、注意を集中できない							2	2		1	5	4
交友	6	一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い	2	2		2	2	1	2	2	1	3	3	1
	19	他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする					1							
	23	他の子供達より、大人といる方がうまくいくようだ	1	2		1		1	1	1		2		3
社交	1	他人の心情をよく気づかう												
	4	他の子供たちと、よく分け合う（ごほうび・おもちゃ・鉛筆など）					1	1			1			
	9	誰かが傷ついたり、怒っていたり、気分がわるい時など、すすんで手をさしのべる					1	2			1	1		1
	17	年下の子供達に対してやさしい					2	3			1	1		
	20	自分からすすんでよく他人を手伝う（親・先生・友達など）												1

3）インタビューで把握した保育者による観察親・観察児の変化（表 4）

インタビューに要した時間は一人平均 25.6 分であった。託児の関わりが中心であるため，観察親の様子よりも観察児の様子の語りが多かった。

保育者が気づいた観察児の様子を，質問紙 SDQ の【①感情】【②行為】【③多動性】【④交友】【⑤社交】の項目に【⑥その他】を加え整理した。【その他】の中で，観察児の年齢に応じた全体的な発達の様子や特性についての内容を多く把握し，【感情】や【交友】の項目に関する内容も多く語っていた。逆に【社交】の項目の内容は少なかった。

観察親については，子どもに対する関わり方や気持ちの持ち方の変化の語りが多く見られた。また，観察親の性格や子育てに取り組む姿勢の変化に気づいていた。観察親の子どもへの関わり方が，プログラムの参加前後で変化したことを多く語っており，それが気持ちの持ち方の変化につながっていると捉えていた。

表 4　観察親・観察児の変化の気づき

	観察児の様子	観察親の様子	保育者の気づき
A	・最初、泣いていることが多く不安な感じ① ・泣いて離れなかったのに、最後は慣れた感じで笑顔も見えた① ・大人を介するが、自信がでてきたのか子どもの良さが出てきた① ・切れてしまうとテレビを叩いたりする② ・保育士と遊びも全くなかったが、自分から色々な所に行くようになった④ ・最後は、泣かずに過ごし、近くに友だちが来るとおもちゃを渡そうとする動作があった⑤ ・言葉が出始めた⑥ ・色々なことを経験することで、発達が少しずつすすんだのではないか⑥ ・一番成長が感じられた⑥ ・最初は踏切のところに何べんも行きたがり、こだわりを感じたが、だいぶ改善されたかな⑥	・うまく関わっている印象、ゆったりと ・子どもの言葉の数が増えているのでお母さんは安心した様子 ・仕事も復帰するとのことで不安定だとも	・お母さんと 2 人で過ごしているので、離れて遊べたらいいかなと思う ・プログラムを受けることにより、お母さんが気持ちの切り替えをうまくやるとか、準備するとか対処する方法を知ることができたと思う ・言葉が出ないし泣いていると聞いていたので、最後に「言葉も出てるし泣かずに遊べている」と伝えると、人から言ってもらえた事がうれしかった様子で気が楽になったように思う
B	・お母さんを追いかけて泣くことはなかった① ・来た時は色々なものに目移りをしていた③ ・後半はちょっと動き出し、固定の場所ではなく、うろうろしていた③ ・泣かずに自分の世界で、マイペースに過ごしている④ ・集中して遊ぶことはでき、やり取りもしっかりとできている④ ・友達が来た時は受け入れたり、嫌がることもなく場を共有したり、良い方に向かっている⑤ ・1時間ずっと横になって、睡眠が崩れているのかもしれないが車で遊んでいた⑥	・最初はどうしたらいいのという感じだった ・思いつめた顔が減った ・お母さん自身が明るくなった ・最初はパニックになったと聞いたが、時間がたったら落ち着いて、振り返りができていた ・育児講座も参加し、色々な所に出て先生の話をよく聞き、少しずつ自信がついてきた様子 ・まじめ過ぎる感じ ・とても忙しそうで、ばたばたした印象	・子どもとの歯車が合っていないのかなと思う ・トリプルに来るうちに自分ことを言ったり、いろんな人の意見を聞くことができて、怠慢な所を責めていたが、そういう時があってもいいんだ、助けを求めてもいいんだと手立てを学んだと思う ・困った場面でどうしたらいいか、お母さんが相談できたり、やり方を習得されていた。トリプルに期待していた部分で、子どもも変わってきているなということが見えた ・家庭についてはわからない部分である ・センターの利用も最近ないので、どこに行かれているのかわからないところがある

①感情②行為③多動性④交友⑤社交⑥その他で内容を分類した

	観察児の様子	観察親の様子	保育者の気づき
C	・表情に出さない、しゃべらない、友だちとも関わらない①④ ・新しい所が不安で、ちょっと場面に慣れにくい① ・知っている先生が来ると、かなりはしゃいでいた② ・少しわがまま② ・集中力がなく、うろうろして落ち着きがなく動いている③ ・相手を見て、お母さんの前では大人しくして、人がいたら怒らないだろうとはしゃいだりする④	・駄目と言うのが苦手で右往左往した感じだった ・子どもが主導で、「叱ったら泣くので叱れない」と言っていた ・一人で黙々と遊んでいる、それを静かに見ている感じ ・子どもの特性がわかってきた ・プログラムの次の時には納得されて、「試してみた」と言われた ・子どもが大きな声で泣き感情が出せるようになり、お母さんも徐々に心を開くようになり、表情が変わった時期があった ・人と話すのが苦手	・お母さんの前ではそれほど困らせることがないが、第三者から見れば、ちょっと多動ぎみだったりすることがあり、それを話したら「そうなんだ」と言われ、気づいて欲しいところもある ・親子教室で、友達との関係で「駄目だよ」と言うとすぐ泣いていたので、お母さんに家でも「駄目なことは駄目だと伝えましょうね」と話を重ねていた。少しずつ変わってきたので、ここでトリプルを紹介したらどうかと思い話をしたら、「是非参加したい」と言われた。以前のお母さんなら難しかったと思うが変わってきたと思った ・集団で目立つところがあって気づかれたと思う ・トリプルの中で、自分で考え工夫してご褒美に車のかるたを作っていた。親子教室を終了しても、自分の意思が出てきてうれしかった ・子どもの機嫌をとる感じだったけど、子どもの関わり方を勉強して自信をつけたように思う
D	・ぼんやりしていて、おどおどしていたが少し和らぎ、顔の表情につながった① ・自我がでてきて、「嫌だ」とか口で反抗するようになった② ・最初は余り集中して遊べなかったり、動きが多かった③ ・同じおもちゃで集中できるようになった③ ・環境に慣れたのか、友達との場所が楽しいとわかると、すごく遊んでいる④ ・順番を待つとか、言われて座るとか対人との関わりが少しずつできてきた④ ・言葉が不明瞭なところがあり、少しゆっくりめ⑥ ・話は通じて理解ができてきた⑥ ・経験することで成長した⑥ ・買い物に行っても変更することが苦手で、こだわりがある⑥	・「子育てが下手なんです」と聞いた ・少し一緒に待ったり、やり方を変えたり家でもできている様子 ・最初はしんどそうで、「こんなことができますね」と言っても、共感できず、そんな話をしてほしくないという感じだった ・今は表情が良く、「できますね」と言うと受け止められるし、お母さん自身もやりやすくなったと話す ・トリプルが終わって、お母さんが明るくなって自信が見られるようになった ・子どもの表情が出てきて、その分お母さんも明るくなった	・お母さんと1対1だと子ども自身の思い通りだったと思うが、託児の中で順番にトランポリンをするとか家の中では経験ができないことができたと思う ・今の一時利用は月に2回ぐらいなので、もう少し集団経験を積んだらいいかと思い、親子教室に誘っている ・他の先生方からも、お母さんにとっては良かったのではと聞き、トリプルによってお母さんは変わったと思う ・子どもの行動の意味に気づいた所があると思う
E	・不安感が強そうな、変わったことをするのが苦手な印象だった① ・物静かだが、家ではわがままで、お父さんとはダメだと聞いた② ・お母さんとだけ関わることで落ち着いているのかなと感じる④ ・どこに行くのも好きな人形やおもちゃを、落としそうなぐらい持たないと来られなかった⑥ ・特性があり、過敏なところはほとんど変わりがない⑥ ・しんどさがあまり改善していない⑥ ・対人や偏食も大変だった⑥	・最初、言葉かけが苦手で子どもの後ろから声をかける感じだった ・勉強して子どもの前から話すとか、ゆっくりと話すとか、わかった様子 ・お母さんの変化は目に見えないが、色々考えていて、来て良かったという気持ちがある ・支援員の講習を受けると資格をもらえると調べ、熱心である ・トリプルによい評価を持っていて、他の人にも是非知ってもらいたい、発信したいと言う	・自分の子育てに、手立てや困ったことが具体的に示されているのが分かりやすかったこと、教科書があって目で確認できて、やってみたら子どもの反応があったので手ごたえを感じていると思う
F	・都合が悪くなったら、お腹が痛くなったりした① ・気分の波がある① ・場面展開になると、嫌がるのが見えていた② ・やりたい気持ちがあり、何も言わずに手が出てしまう② ・かなり動きが多くて、ちょっと気に入らないと暴れる感じだった③ ・遊ぶことが楽しめてきた感じで、少し改善しているかな④ ・年齢があがってからのしんどさがある⑥	・帰る時、どうしていいかわからない感じで、積極的にやってみようとかアプローチしてみようとする姿ではなかった ・2人では落ち着いているらしく、「そんなことはしないんです」と言う ・子どもの姿を目のあたりにしても、声を荒らげることはない ・困り感がないように見える ・対処の仕方がわかったから、自分は楽になった様子	・子どもの譲れない気持ちや、切り替えができないところ等を気付いておらず、親子教室でも、「約束したら毅然とした態度で対応しましょう」と話していた。お母さんは変わったと思う ・最初は言いなりだったのが、プログラムが終了するまでに手立てを知って、学んだことが身についてきているのではないかと思う ・小集団の時にうまくいかないのはどうしてだろうとお母さんが考え始めた時期と、トリプルで習っている時期が同じだったと思う ・トリプルに私達も参加して、お母さんから同じ悩みを私達も聞いたと思った

①感情②行為③多動性④交友⑤社交⑥その他で内容を分類した

6. 考察

1）トリプルＰを受講した観察親・観察児の特徴

今回のプログラムの観察親は全て母親で観察児は第一子であり，6名の出産平均年齢は33.7歳であった。全国統計において第一子出産平均年齢は30.7歳（令和元年度）[11]で，比較すると高い年齢での出産であるといえる。梅津は[12]，子育て支援センターを利用する高齢出産女性に焦点をあてた心理的体験の研究において，「知識が先行するが故に，自分の子どものいきいきとした体験に寄り添えず，目の前にいる子どもに焦点を当てることが難しい」ことを指摘している。プログラム参加前からＺ拠点を利用している親子が多いことより，その背景の一つとして高い年齢での子育てにおける困り感が存在するのではないかと考えられる。

グループトリプルＰはグループダイナミックスがもたらす効果があるとされている。保育者は，観察親の「トリプルで自分のことを言ったり，色んな人の意見を聞くことができ，助けを求めてもいいんだ，怠慢なときがあってもいいんだ」と発言を聞き，多様な子育ての方策があることの気づきを語っている。先述した梅津は，「目の前にいる子どもに焦点を当てることが難しいが，センターで育児を共有することにより，知識や自分のペースではなく，目の前の子どもに目を向けることができるようになる」ことを明らかにしている[13]。観察親の特性において，今までの関わりにおいて気づきを促していたがなかなか変容が難しかったことを考えると，理論に基づいたトリプルＰを活用することは，高い年齢層において有効的であったとも考える。

また，保育者からは，観察親の性格についての語りもあった。「とても忙しそうで，ばたばたとした印象」，「子どもとの歯車が合っていないのかな」と，観察児の特性に加え，元々の観察親の性格が影響し，今の子育ての困難さにつながっていると感じていることがうかがえた。武田は[14]，拠点の支援において「親子としての関係が始まって間もない時期に，親の情緒面の安定を図ることや親子関係の齟齬を修正すること，さらに子どもの発達を保障することの２つが予防的支援の要点である」と述べている。このことは，地域子育て支援拠点において保育者の特性を生かしたプログラムの実践の意義につながるものであると考える。

2）保育者の託児での関わりの専門性

トリプルＰの受講者は集合セッションに参加する約２時間は親子分離の状態で過ごすことになる。プログラムの初期は，観察児が環境に慣れるまでに時間がかかり，不安な様子であったが，徐々に子ども同士や保育者との関わりができるようになった。保育者は，Ｚ拠点に馴染みがない観察児や，観察親と信頼関係が築かれていない状態での託児の受入れは，親子に戸惑いや不安も大きいと考え，実施前の情報収集や最初の出会いは大切にし，スタッフ間での情報共有や自らの経験を生かしながら，観察親が安心してセッションに臨めるよう配慮していた。

また，保育者は，託児の機会を子どもらの小さな集団生活の一経験として捉え，保育の中で様々な工夫を凝らしていた。例えば，集まりの時間を設け皆でおやつを食べたり絵本を読み聞かせしたり，遊びの中に順番制を取り入れ座って待つ機会としたりである。保育者は，限られた環境の中で遊びの導線を考え，入念な準備を行っていた。橋本が[15]，「保育士は子どもの成長，発達に直接的な責任を有し，援助は子どもに対して直接的に実施されている」と述べているが，短い託児の関わりの中で，観察児と向き合い保育者としての専門性を生かした取り組みがなされていた。トリプルＰの受講に伴う家庭での取り組みと相乗効果をもたらす託児での関わりは，トリプルＰの効果に影響するのではないかと考える。

託児を通して保育者が観察児と関わる中で，SDQの「あてはまる」のチェック項目がプログラム開始前よりも終了後に増えている結果であった。保育者は，託児を通して観察児と関わる中で，個々の観察児の特性に対する理解を深め，観察児の困難な状況や場面に気づくようになったのではないかと考えられる。地域子育て支援拠点の支援者を対象とした金山の調査[16]で，気になる子どもについて，「多動・落ち着きがない」「表情がない」「かんしゃくが強い」の３項目が高率に見られ，年齢が低い子どもの行動として捉えやすい特徴であることを報告している。今回のSDQのチェックにおいても，かんしゃく等の【行為】や【多動性】が多く挙がっており，同様の結果と考えられる。さらに，【交友】の中で“6.一人でいるのが好きで，一人で遊ぶことが多い”に多くチェックしていたのは，子どもの発達過程を継続的に理解する視点から，保育者が気になる点であると思われる。また，【感情】の中で不安や自信のない姿を捉えており，先述の金山の調査における「表情がない」の項目につながっていると考えられる。しかし，最初は泣いて不安だったＡ児が泣かずに過ごし，子ども同士の関わりができてきた姿や，おどおどしたＤ児が楽しい場所とわかり集中して遊んでいる姿など，託児の機会に集団での経験を積み，観察児の社会的行動を促進していると考えられた。

3）保育者が捉えた地域子育て支援拠点におけるトリプルＰの意義

保育者は，今までＺ拠点において，親子の様子から集団の場面での観察児の困難性を把握し，観察親が意識していない問題への気づきを促し，今後の集団生活への適応につなげる支援を行っていた。保育者は，観察親が観察児の多動性に気づいていないことや，観察児の譲れない気持ちや場面展開の困難さに気づいていないことを課題として挙げていた。親子教室などでの関わりの中で，保育者の思いを観察親へ伝えているが，観察親の意識や行動が変わることへの困難さを抱えていることがうかがえた。このような中で，トリプルＰの受講が効果的ではないかと判断し，受講を勧める声かけを行った経緯がある。

この結果，保育者は，観察親の観察児に対する関わり方の変化を捉えていた。観察親の「最初はどうしたらいいのという感じ」や「右往左往した感じ」など，観察児への関わり方が分からず戸惑う姿

を捉えていたが，トリプルＰを受講することで「(子どもへの関わりが）やりやすくなった」，や「(親がやり方を）わかった様子」など，観察親の変化について語っていた。また，実際に家庭での観察親の取り組みを把握し，「(親が）子どもの特性がわかってきた」と，観察親の観察児の行動への理解が深まっていることを捉えていた。Ｅ児については，「子どもの特性があり，過敏なところはほとんどかわりがない」とプログラム前後で変化があまりなかったとしているが，観察親の観察児への関わり方が「(子どもに対する）言葉かけが苦手で，子どもの後ろから声をかける感じ」から「勉強して子どもの前から話すとか，ゆっくりと話すとか」と具体的に関わり方が変化していることを捉えていた。トリプルＰの受講による観察親の育児行動の変化を実感することは，現状の支援の困難さに対する打開策の一つとなり，保育者の今後の親支援の継続と効果の期待感をもたらし，保育者の負担の軽減につながっていると考えられる。

また，親の気持ちの持ち方の変化については，観察親の保育者の言葉かけを受け止める余裕がなく不安な様子から，トリプルＰを受講後，表情が変化し明るくなり，思いつめた表情が減ったことを捉えていた。トリプルＰをきっかけに，観察親の行動の変化が子育てのやりやすさにつながり，手ごたえを感じることで少しずつ自信を持ち，気持ちが前向きになり良い循環となっていると考える。観察親に対して「トリプルの中で，自分で考え工夫してごほうびに車のカルタをつくり（中略)，親子教室を終了しても自分の意思がでてきたことがうれしかった」とその変化を捉え，喜びを表出していた。「子育てへの自信は子育ての質を大きく左右し，親自身，児，家族に多大な影響を与える」[17] とあるが，Ａ児やＤ児は「経験することで成長した」と語っており，観察児の良い変化が見られることで，より前向きな取り組みにつながると考えられる。トリプルＰの参加をきっかけに学習意欲を向上させた観察親の語りもあり，保育者は，トリプルＰ受講者の子育てにトリプルＰがプラスの影響を及ぼしていると捉えていることが考えられる。

Ｚ拠点ではひろば事業，一時預かり，親子教室など様々な事業を展開しており，どの事業に参加しても，職員間で情報共有され，利用者がフォローされやすい環境であると考える。地域子育て支援センター職員の専門性として「①コーディネート　②コミュニケーション　③引き出す力」が求められているとしている [18]。トリプルＰは制度的な活動ではないが，専門的な子育て支援の資源の一つであり，子育て支援拠点における支援の対象者を，トリプルＰにつなぐことで，重層的な支援が可能となることが示唆される。

7. まとめ

地域子育て支援拠点におけるグループトリプルＰの実践において，託児を担当した保育者が捉えた観察親・児の変化の気づきについて以下の点が明らかになった。

1）保育者は，観察親の観察児への関わり方や気持ちの持ち方の変化を捉えていた。

2）日々の保育実践の中で，観察親の行動変容への対応に苦慮していたが，トリプルＰを活用することで観察親の変化を期待し，保育者の負担の軽減につながっていることが考えられた。

3）地域子育て支援拠点において，子育て支援の必要な親をトリプルＰにコーディネートすることで重層的な支援が可能となることが示唆された。

8. 今後の課題

子どもの変化の認識を把握するために質問紙 SDQ の項目の有効性は見出せたが，統計的な検討に至らず，今後，質問紙活用の検討を行い，さらに，実際の母親の子育てへの認識との比較も検討する必要がある。

謝辞

研究にご協力いただきましたＺ拠点の保育者の皆様に感謝申し上げます。

なお，論文の一部は，第 73 回大会日本保育学会（2020 年 5 月 16・17 日近畿ブロック）で誌上発表した。

参考文献

1）地域子育て支援拠点事業実施状況　令和元年度実施状況　厚生労働省 Hp（2020. 9. 10 アクセス）

2）渡辺顕一郎，橋本真紀（2018）『地域子育て支援拠点ガイドラインの手引き』中央法規

3）周防美智子他（2017）地域子育て支援拠点事業における支援に関する研究　岡山県立大学保健福祉学部紀要　第 24 巻 1 号　81-89

4）橋本真紀（2011）地域を基盤とした子育て支援実践の現状と課題　社会福祉学　第 52 巻第 1 号　43-54

5）肥後祥治（2017）「気になる子」への対応―子ども，保護者への包括的取り組みを目指して―　東京医学社　『小児内科』Vol49. No3　P324-327

6）西嶋真理子，星田ゆかり，松浦仁美（2015）発達障害児の親を対象に保健師が行った前向き子育てプログラム（トリプル P）の評価―評価指標による介入効果の分析―　日本地域看護学会誌　Vol18　NO2, 3　41-50

7）増田裕美，西嶋真理子，田中輝和（2016）前向き子育てプログラムに参加した親における子育てについての認知と行動の変化　四国公衆衛生学会雑誌　61，1，71-79

8）増田裕美，西嶋真理子（2018）前向き子育てプログラムに参加した学童期以降の発達障がい児の親の子育てについての認知と行動の変化　日本地域看護学会誌　21，3　49-55

9）カレン・ターナー，キャロル・マーキオーダッヅ，マシュー・サンダース　ファシリテーター―マニュアル改訂第 2 版 3-7

10）Ruchkin V, Koposov R, Schwab-Stone M. (2007) The Strength and Difficulties Questionnaire: scale validation with Russian Adlescents. J Clin Psychol. 63, 9, 961-969.
11）令和元年（2019）人口動態統計月報年計（概数）の概況　厚生労働省
12）梅津碧（2017）子育て支援センターを利用する母親の育児体験への一考察　高齢出産女性を中心として　山梨英和大学心理臨床センター紀要　12 号　12-19
13）同上
14）武田洋子（2016）地域子育て支援拠点における支援力向上のための一考察　埼玉学園大学・川口短期大学紀要　30 巻　147-157
15）橋本真紀・日浦直美（2002）地域子育て支援センター職員の専門性に関する考察Ⅰ　聖和大学論集　第 30 号　1-9
16）金山美和子（2016）「気になる子ども」「気になる保護者」の理解と支援：子育て支援者と保育者の専門性に着目して　長野県短期大学紀要　70　169-180
17）涌水理恵（2016）ペアレティングプログラムが発達障がい外来に通院中の児・親・家族に与えた効果についての定量的 / 定性的考察　家族看護学研究　第 21 巻　第 2 号　158-170
18）前掲 15）